

巻頭言

日本 ALS 協会北海道支部支部長 山田 洋平

日本 ALS 協会北海道支部支部長の山田洋平でございます。10 月に入り、私の住む札幌市は、ようやく例年の気温に落ち着いて参りました。外を車椅子で歩きますと、雪虫が舞い踊っており、程なくして、雪が降る季節になるでしょう。さらに、今年は、1 カ月以上早く、インフルエンザが流行期に入っているようです。

皆様におかれましては、新型コロナウイルスを含めましての感染症対策を講じていただきますようお願いを申し上げます。



さて、私の、前回の「絆」でお伝えをしておりました、「大事件」のお話をさせてください。まず私が、皆様にお伝えしたい事は、器械は、絶対に、信用してはいけないという事です。7 月の半ばに、私は、日本 ALS 協会の元会長である岡部さんのお通夜と翌日の葬儀に参列をしました。次に、私に起きた事は、私のように ALS などの難病と生活をされ、人工呼吸器を利用されている当事者さんや、ご家族、そして、ヘルパーさんと医療関係者の皆様に、お伝えしたい事です。

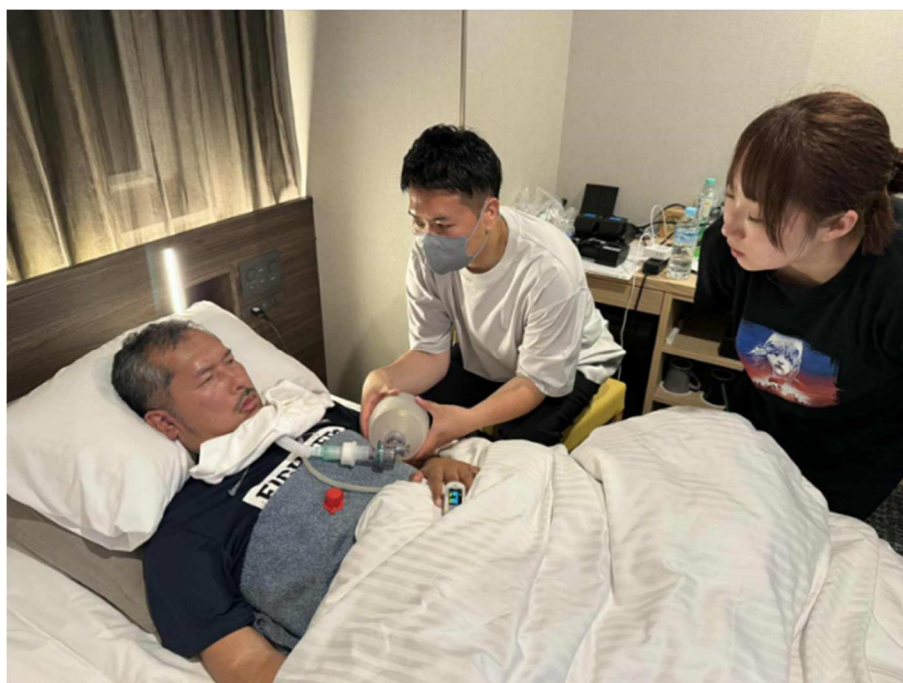
岡部さんのお通夜に参列をして、ホテルに戻り、ベッドに移乗をして、落ち着いたと思ったのもつかの間、次の瞬間、呼吸器から「ポン！」という音とともに、呼吸器からの送風が止まりました。私が何よりも驚いたのは、スタッフ 2 名と妻が、すぐに、「アンビュー(手動蘇生器。以下アンビューと表記)で空気を送ろう！」と冷静に言ってくれたことです。呼吸器が壊れてからアンビューで空気を送るまでの時間は、30 秒すらかかることもなく、まさに、電光石火の早業でした。皆が、このスピードで、私の蘇生にとりかかれたのは、私の会社で、毎月実施している呼吸器が壊れたときの対応を、皆で緊張感を持って取り組んでくれている成果でしょう。この命を守る訓練が、誰 1 人パニックになることなく訓練の延長としてできた事に繋がったのです。私が、皆に、「アンビューを手の届くところに、常に準備をしておいて下さい。」というお願いを、皆が確実に履行してくれたことも、今回のスピーディーな蘇生に繋がりました。

今回の様に、突然、呼吸器が壊れることがあれば、命を落とす呼吸器ユーザーが居るかもしれません。人工呼吸器は、息をするのを手伝ってくれる器械です。器械は、必ず故障します。器械は、絶対に信用してはいけないのです。それ故、私のような人工呼吸器ユーザーは、常に緊張感を持ち、家族やヘルパーと医療従事者と、いつ呼吸器が壊れたとしても、即座に対応できるように、アンビューを使つての訓練をしなければいけないのです。

いくらスタッフと妻がアンビューの扱いに慣れていたとはいえ、3人で2時間をノンストップで動かし続けるのは、肉体的にも精神的にもきつかったことでしょう。突然の呼吸器の故障に対応してくれたスタッフと妻に、感謝した東京の旅でした。特に、妻には、スイスの時の旅も含めて、今回で、3度命を救われました。通常であれば、スタッフたちの負担を考えて、すぐに、救急車を呼ぶ選択が正しかったのかもしれませんが。しかし、皆が、迅速に動き、すぐに、呼吸器の手配に目処がつき、3名が交代でアンビューを押し続けてくれると言ってくれたので、今回は、救急車を呼ばない選択肢を選びました。

この時、10日ばかり喧嘩をしていた妻からは、「私が手を離したら、あなたは死ぬんだからね。ごめんなさいと言ってごらん！」と言われて、まさかの、このタイミングで仲直りを果たしました。この様に、後半は、冗談を言える余裕はありましたが、人工呼吸器を利用している全ての方に、トラブルなどが発生した時の対応を、啓発をしていかなければいけないと考えた「大事件」でした。そして、結果として、呼吸器のメーカーさんに、迅速に動いていただき、わずか2時間ほどで、新しい呼吸器を使うことができました。

最後に、もう一度、お伝えさせて下さい。「器械は信用するなかれ。命を守るべき訓練は、日ごろからするべし！」というお話でございました。皆様、どうぞ、お身体をご自愛ください。



アンビューを押し続けているところ